

## 佳作

### 私の民謡物語

秋田県大潟村立大潟中学校

2年 佐藤 苺杷

「♪トレタエ トレタエ ハタハタ大漁ダ ヨイショ ヨイショ ヨイショ  
エンヤラホイ ドン♪」

一節だけなのに、その時の感動を今でも鮮明に覚えている。民謡をやってみ  
たい、と。

秋田の伝統文化を調べる。これが昨年の総合的な学習の探求課題だった。秋  
田の伝統的な音楽といえば民謡だ。民謡の歌手が激減していると聞いたこと  
があった私は「民謡を未来へ」をテーマに学習を進めることにした。

しかしそこからが大変だった。インターネットでの調査は手軽だったぶん、  
「民謡とは何か」が分かっただけだった。私は民謡の調査の難しさに絶望し、  
テーマを変えようかどうか迷った。そんな時、ある先生にこう言われたのだ。

「民謡に詳しい人に直接インタビューしたら？」と。知らない人をお願いする  
のが億劫で、気が進まない旨を話した。でも先生と話しているうちに、他に方  
法はないことに気付き、勇気をもって行動を起こすことにした。

調査に協力してくれたのは、私の通う中学校の音楽教諭の工藤先生と、日本  
民謡協会男鹿睦実会に所属している、伊藤善春さん。男鹿市は私が住む大潟村  
の隣りにあり、昔から民謡が盛んなことで知られている。そして伊藤さんは、  
その男鹿市に2008年、民謡教室を立ち上げ、小中学生などに民謡や三味線の指  
導を行っていたり、自ら経営する飲食店で息子さんとともに三味線を演奏して  
いたり、民謡界では有名な方である。

まず、工藤先生へのインタビューでは、音楽教諭になるために西洋の音楽を  
中心に学ぶということを知った。だからこそ自ら進んで研修を受け、民謡の基  
礎を学んだそうだ。民謡は難しいが、生徒に民謡の楽しさを伝えたいと考えて  
いること、民謡の歌手の減少も踏まえて、地域の先生を呼んでスペシャルな  
授業をしたいとも話していた。工藤先生からは、専門外である民謡も大切に  
守っていききたいという情熱を感じることができた。

次に、伊藤善春さんへ電話インタビューをした。会ったことがないので、と  
ても緊張した。だが、始まってみれば伊藤さんののにじみ出る優しい人柄のおか  
げで、リラックスしてインタビューを進めることができた。そして、民謡のプ  
ロの知識量に圧倒されながらも、インターネットでは絶対得られないようなお  
話をうかがえて、とても参考になった。そして、私の住む大潟村にも昔は民謡

を謡う会があったという、意外な事実も知ることができた。やがてインタビューも終盤にさし掛かったころ、せっかくだから、と民謡を一節謡っていただくことになった。曲名は「ハタハタ音頭」。秋田県沖などで秋に大量に漁獲があり、秋田の名物でもあるハタハタ。大量のハタハタが岩にぶつかる様子が「どん」という歌詞に表されている部分もあり、ハタハタ漁を力強く表現している唄だ。体育祭で踊りを披露する学校もあり、秋田県で有名な民謡の一つであるそうだ。いよいよ唄が始まった。「♪トレタエ トレタエ ハタハタ大漁ダ ヨイショ ヨイショ ヨイショ エンヤラホイ ドン♪」たった一節。受話器から聞こえたのは本当にこのたった一節だけだ。だが、私は鳥肌が立った。そして、これまで経験したことのない高揚感に包まれた。伊藤さんが表現する、民謡ならではの節回しと独特な響き、溢れる活気に包まれ、いつの間にか「私もこれを謡いたい」と思っていた。感動という簡単な表現で表せない思いでもあった。そして、インタビューを勧めてくれた先生にも改めて感謝したし、これからは何でもできそうだという自信も芽生えてきたのだ。電話越しでは伝わらないかもしれないと思ったが、拍手をせずにはいられなかった。伊藤さんに、私の思いは伝わっただろうか。

もう一つ、忘れられない出来事があった。それは、この作文を書いている夏休みのこと。劇団わらび座から、あるミュージカルのお知らせが届いたのだ。その演目は、「青春（アオハル）するべ！ ～由利高校民謡部ストーリー～」民謡を生唄で聞けるかもしれないミュージカル。こんなチャンスはない。絶対に観たい。そう思った。しかし観劇する願いはかなわなかった。悔しくて、しょうがなかった。改めて自分はこんなにも民謡を求めていることに気付いた。

「民謡をやりたい」私の夢だ。この夢を現実にするために、民謡についてもっと深く調べてみたり、発表会に足を運んでみたりしたい。伊藤さんは、「民謡には古里への思いがいっぱい詰まっている。子どもたちが全国どこに行っても古里の唄を謡えるようになってほしい」という願いを込めて民謡教室で指導しているそうだ。伊藤さんの思いは未来へと繋がっていくだろう。佐藤苺杷の民謡物語は、まだまだ始まったばかりだ。